

母なる物語としての「吸血鬼ドラキュラ」 あるいは、イメージのフクロサントリウムを超えて

平松 洋・インディペンデント・キュレーター

一 メディアに蔓延するドラキュラ・イメージと

普遍的属性

一八九七年五月、世紀末のロンドンでブラム・ストーカー^{*1}によつて生を与えられた不死者、ドラキュラ^{*2}。そのイメージは約一世紀の間というものの、様々なメディアに感染し、あらたな不死者の物語を次々に生み出してきた。

さらに、キャラクターだけでなく、そのシチュエーションまで考えるとその影響力ははかり知れない。たとえば、原作に描かれ、初期の映画「ノスフェラトゥ」^{*4}にも登場した船のシーンがある。吸血鬼を乗せた船の乗員が次々に死んでいくという設定は、「エイリアン」^{*5}や「遊星からの物体X」^{*6}、「2001年宇宙の旅」^{*7}まで繰り返し描かれてきた。さらに、死の感染と時間をおいた発病、それに介在するメディア（媒体＝巫女）というテーマであれば、「リング」^{*8}さえもドラキュラの変奏であると言えなくもないだろう。

いずれにしてもドラキュラのイメージは、あらゆるメディア

の中に蔓延していることは確かである。にもかかわらず、その元凶である「ドラキュラ」を読んでいる人は、そんなに多くはいないだろう。その証拠に、一般にドラキュラは棺の中で眠っていると思われるが小説を読むと、そんなシーンは一度もでてこない。ドラキュラが眠っているのはトランシルヴァニアの土をつめた箱中である。

つまり、小説からドラキュラのイメージが作られているのではなく、間テクスト性ならぬ間メディア性ともいえるイメージの伝播と連鎖が、ドラキュラのイメージを作り上げてきたと言えるのである。それは、名も知れぬフランケンシュタインの怪物が、創造者の博士の名（父の名 Nom-du-père）で呼ばれているのにも似ている。つまりは、スクリーンをはじめとした映像メディアによって物語が、まさにスクリーニングされてきたわけである。その意味では、こうした怪物表象は、歴史的集合無意識（ユング的な意味ではない）の中で形作られてきたと言えるかもしれない。

しかし、ドラキュラという怪物表象の中でなぜかわかわらずに持ち続けられたイメージがある。それは、ドラキュラの弱点を構成する以下の三つのものたちである。

・ドラキュラは十字架に弱い。あるいは、十字架を嫌う

・ドラキュラは鏡に映らない。あるいは、鏡を嫌う（あるいは光に弱い）

・ドラキュラはニンニクに弱い。あるいは、ニンニクを嫌う

幾多のメディアを介してもスクリーニングされることなく持ち続けられてきたドラキュラの属性たち。その属性が持つ意味を見極めることによって、ドラキュラという怪物表象が、その深層では何を意味していたのかを明らかにするのが、本論の目的である。

ただし、紙数に限りがあるので、その詳細は拙著『ドラキュラ100年の幻想』^{*}にゆずり、ここでは十字架と鏡にしばってその概略のみを紹介するものである。

二 十字架信仰に潜むカトリックの呪術性

ドラキュラが嫌う十字架とは、一般的にはキリスト教的な文脈で語られてきた。しかし、本当にそうなのだろうか。

まず、小説の中では、十字架は、ジョナサンがドラキュラ城へ行く途中のヒストリッツで泊まった宿のおかみが、彼の身を案じて、手渡したものだ。このときジョナサンは躊躇する。

「これには、自分もちょっと面くらって、処置に窮した。自分としてイギリスの一国教徒として、こういうことは一応偶像崇拜として教え込まれてきた人間である」^{*}

つまり、旧約聖書にあるモーゼの十戒の第二戒^{*1}によってユダヤキリスト教では、偶像崇拜が禁止されている。本来ならば、十字架にキリストの十字架上の死を象徴することはもちろん、その十字架で悪魔を払う行為など認められるはずがないのである。ことに敬虔なプロテスタントであるジョナサンであればなおさらである。

はたしてドラキュラはキリスト教の十字架によって退治されているといえるのだろうか。ここで注目すべきは、この時、宿のおかみがジョナサンに渡したのが、ただの十字架ではなく「ロザリオ^{*1,2}」と記載されていることである。ロザリオは基本的にローマ・カトリックだけのもので、プロテスタントはもちろん、トランシルヴァニアのルーマニア系住民に根強く信仰されている東方正教会でも使われることはない。とするならば、ジョナサンの躊躇とは合理主義的なプロテスタントによるカトリックの呪術性への拒否であり、ドラキュラ退魔の十字架とは、カトリックの呪術性にこそ、求められるべきではないだろうか。

そこで、キリスト教、特にローマ・カトリックにおける十字架の歴史を簡単に振り返ってみよう。そもそも、十字架とはキリスト教にとっていかなる存在だったのだろうか。

三 十字路のファロス、道祖神としての十字架

実は、十字架は六世紀までは、キリスト教美術の中にほとんど登場していない^{*13}。それどころか、初期キリスト教においては十字架崇拜は、偶像崇拜、あるいは、異教徒のものとして厳しく禁止されてきたのである。

たとえば、三世紀のキリスト教の神父ミヌキウス・フェリクスは、キリスト教徒が十字架を崇拜することを次のようにとがめたという。「お前たち、それでは異教徒ではないか。木の十字架を崇拜するなんて、それはまさに異教徒のすることだ^{*14}。」と。

つまり、十字架信仰とは異教徒の者たちが行ってきた呪術信仰であり、本来的にはキリスト教のものではなかったのである。では、何故、こうした十字架信仰をキリスト教は取り入れなければならなかったのだろうか。

結論から言えば、キリスト教が広い地域に伝播するためには、従来からその土地で信仰されている土俗信仰が持つ強力な呪術性に対抗しなければならなかったからである。特にローマ・カトリック教会は、ガリアを含む広大な異教の地を抱えていたのである。

たとえば、セーヌ以北の地に布教した聖エリギウスの『伝記』には次のような異教的伝統への説教が語られていた。

「……いかなるキリスト教徒も、占い師(imputas imputas)を信じてはならず、十字路に座ってはならない。それは悪魔的な行為だからである。……いかなるキリスト教徒も、(異教の)

礼拝堂、岩、泉、樹木、囲い地、あるいは十字路のところで、灯明をあげたり祈願してはならない。……病氣の際に、祈祷師(præcantatores)、預言者(divini)、魔術師(sortilogi)、魔法使い(caragi)を呼びにいかないように。泉、樹木、道の分かれるところに悪魔的な護符をはらないように。……どこであろうと、家の中や、道や、道が分かれているところで、恥ずべき淫らな言葉を述べてはならない^{*15}。」

ここには当時の土俗信仰の伝統習慣が詳しく述べられているのだが、これらの資料から見えてくるものは、キリスト教のいう異教の宗教が、「泉」や「樹木」とともに道や道の分岐点である「十字路」に対して特別の関心があったということである。

では、そもそも道の分岐点に立ち現われるものとはなんだろうか。実は、十字路や三叉路に立てられていたのは、洋の東西をとわず、道祖神であった。そして、ギリシャ・ローマ世界で、道祖神とされたのはヘルメースのことであり、彼は「道を守護する神」、エンオディオス(Ἐννοδιός)と呼ばれ、十字路にはヘルメース柱像が建てられていた。また、三叉路の守り神ヘカテーに捧げられたヘカテアという男根柱も辻や家の出入り口に置かれていた。両者はともに、日本の道祖神やインドのリンガとおなじく、石で造られた男根像であらわされるか、あるいは、石柱に顔と男根が彫られていたのである(写真1)。

通常、ギリシャ神話の伝令神とされるヘルメースだが、ご神体が十字路に置かれた男根であると気付くと、その属性の多くが説明できる。たとえば、豊穡を意味する男根神は、その形態

から蛇神とされ豊穡の月の女神に関連する。さらに十字路に置かれたことから、交通の神となり伝令の神、市場の神となり、四つ角を意味する数字の「4」や十字によって象徴されたのである^{＊18}。その十字は「4」を逆さまにした形で描かれていたのである。キリスト教徒の十字の切り方はまさにこれを借用したものだといわれている。

つまり、十字架信仰とは本来、ヘルメースに代表される道端の道祖神への祈りであり、十字とは道の分岐点（十字路）に置かれた男根神自身を意味していたのではないだろうか。

クリスマスをミトラ教の冬至の大祭に移動してまでも、異教の民を改宗させたいと考えた、キリスト教、ローマ・カトリックは、まさに異教の十字架信仰をキリスト教の中に取り入れていく。こつしたシンクレティズムの十字架信仰をストーリーカーのドラキュラはその原点へと回帰させたのである。



写真1 シノフス島のヘルメース柱
像 アテネ国立美術館蔵

四 男根（ファルス）に象徴化される豊穡の大地母神

ここで、ヘルメース柱像とほとんど区別できないとされた男根柱ヘカテアの神、三叉路のヘカテ（ヘカテ・トレヴィア）について考察してみよう。

『神系譜』によるとヘカテはレートーの妹とされアルテミスの叔母にあたる。しかし、アテーナイを始めとして各地で、アルテミスはヘカテの名前で呼ばれていたのである。また、エレウシースでアルテミスの母がデーメーテルだとされたのと同じく、ヘカテの母もデーメーテルだとする話も伝わっている。しかも、ヘカテはデーメーテルの娘、冥府の女王ペルセポネーとしばしば混同されている。

また、アルテミスの双子の姉弟であるアポローンもヘカテの男性形ヘカトスと呼ばれていたのである^{＊19}。これらを総合すると、ヘカテは、アルテミスと同一神であり、デーメーテルをはじめとした豊饒女神につけられた名前の一つだったのではないだろうか。

この豊饒女神は、三相一体の女神として、あるときは、乙女ヘベ 母親 ヘラ 老婆 ヘカテ の姿をとるとされたり、天界での姿が、月女神 セレーネー であり、地上では女狩人 アルテミス、冥界での姿が破壊者 ヘカテ であるとされたのである。

つまり、豊饒女神の三相 乙女 母親 老婆 は、
天界 地上界 冥界 の象徴であるとともに、満ち

て欠けていく月の相と全ての生命の 誕生 成長 死

に対応していたのである。豊饒神は月女神であるとともに生と死を司る母なる神であつた。そして、母なるものは、慈愛に満ちた存在であると同時に、自らの子宮に主体を飲み込むおぞましき存在だったのである。このおぞましい側面、老婆や冥界の面が強調され、ヘカテは魔界の女王へと転落させられたのである。こうして、豊饒の女神ヘカテの名前は、冥界の支配者、魔界の女王となつていく。つまり、ヘカテとして実体があつたのではなく、豊饒の月女神の暗黒面をヘカテの名のもとに具象化したにすぎないのである。

彼女は、月の明るい夜に、松明をかざし山野を走りさるとされたが、この時、彼女が率いているのが、月女神アルテミスのトテム獣と同じ「犬」であつた。

そういえば、ジョナサンがドラキュラ城で出会つたものこそ、三人の吸血女であり、三相一体の女神に対応していた。さらに、ドラキュラをロンドンへとつれていく船の名は、まさに、ヘカテの母とされた大地（デー）の母（メーテル）、デーメーテル号であり、その船倉（母の体内）から飛び出したドラキュラの姿は、ヘカテのトテム獣「犬」だったのである。

ドラキュラの物語は、ヘカテア＝男根柱に象徴される豊饒の大地母神の物語であり、ドラキュラの本体は男根で表象される豊饒神だつたのではないだろうか。

五 聖ジョージ＝メイボールとしてのドラキュラ

ところで、ジョナサンに十字架をわたした宿のおかみも馬車の乗客たちも何に對して恐れおののき十字を切つていたのである。彼等は、十二時が過ぎて悪魔が開放される「聖ジョージの日」になることを恐れていたのである。聖ジョージの日には、一体何が行なわれていたのだろうか。

実は、トランシルヴァニアのジプシーたちは、聖ジョージの前夜に山に行き、切つてきた樹（メイボール）を花や花輪でがざり、音楽をかなで、歓声をあげながら運んだのである。これはまさに五月に行なわれる諏訪の御柱祭りのそれであり、天岩戸の前に立てられた賢木であり、屹立する男根を表していたのである。その行列の花形が、緑の枝や葉を全身にまとうた若者が扮する「緑のジョージ」であつた。儀式の終盤になると、人型に入れ替えられた「緑のジョージ」を水の中に放り込むのである。これは生贄供犠の儀式そのものであり、植物の死と再生のテーマがうかがわれるだろう。つまり、聖ジョージの日には、植物の再生をこぼぐ豊饒儀礼であり、ヘカテア（男根柱）と同じくメイボール＝男根に象徴される豊饒の大地母神に捧げられた日だったのである。

しかし、豊饒の大地母神の祭りが何故、ドラゴン退治の聖ジョージに結びついたのだろうか。それは、ドラゴン（＝ドラキュラ？）こそが大地の母であり、死と再生、豊饒と生殖の象徴であつたからである。この大地と豊饒の信仰が、「土」を意味する

geos と「耕作」を意味する orge からなる聖人の名前、ジョージに結びついていたのであろう。

いずれにしても、「ドラキュラ」において聖ジョージの日の前夜に森に入ったジョナサンが、森から連れ出したものこそメイポールであり「屹立する男根としての樹」ではなかったか。つまり、ドラキュラとは、死して甦る豊穡の大地母神であり男根を象徴する樹木神だったのだ。だからこそ、植物神ドラキュラは聖ジョージの名前に託された「土」＝大地とともに移動し、故郷の「土」の上でしか眠れなかったのである。

六 デュオニューソス＝ドラキュラの構図

まさに、聖ジョージの日は「土」＝「大地」の宝を守るドラゴン＝ドラキュラを、この世に再臨させるおぞましき日であり、豊穡の大地母神信仰の熱情（パッション）をキリスト教のパッション（殉教者物語）に接木したものでなかったか。そうだとするなら、キリスト教に接木される以前のトランシルヴァニアにおける大地母神信仰とは、いかなるものだったのだろうか。ニコリスキーは『ロシア教会史』の中で次のように指摘している。

「ディオニスに対して教会は聖ゲオルギー（georgos 農夫）の礼拝を考え出し、以前ディオニスの神殿のあった場所に寺院を立て、ディオニスの祭日にあわせて聖ゲオルギーの祭りを行い彼の名をたたえることを勧め、その祭日には、犠牲にいたるまで古い儀礼をそっくりそのまま守るようにしむけたので

ある」^{*23}

とするならば、このまがまがしき太古の神、デュオニューソス＝パックスこそ聖ジョージの日に登場するドラキュラの真の姿ではないだろうか。ここで呉茂一氏によるディオニューソス信仰の特徴を引用してみよう。

「トラキア系信仰の特徴は、信徒の集団における、ことに祭儀ののりの熱狂と興奮で、とりわけ婦人の信徒に甚だしく、神がかりとなって狂い廻るこの信徒の群れは、神と同じくパッコイ（男性）あるいはパッカイ（女性）と呼ばれ、彼らは、家や町を捨てて山野を駆け巡り、手にはいわゆるテュロス thyrsos（蔦で飾った木の枝の杖、頭に松ぼくりを着けたという、パッコス信徒の携えるもの）を執り、夜は炬松を振りかざして叫びながら乱舞して歩く。その挙動やことに力業は常軌では律しきれない、超人的な力をふるい、しばしば、動物や時には小児さえも襲って捉え、引裂いてその生肉を吸うといわれる」^{*24}

このように木の枝を手に山野を巡る行為は、ヘカテーら月女神たちの行為と共通するものであり、まさに聖ジョージのメイポールの儀式と同じであった。つまり、この生贄の供儀により、母なる大地＝土に流される血の構図こそが、ドラキュラの吸血行為であり、供儀の血を吸うことで死して再生する大地の母の隠喩こそがドラキュラだったのではないだろうか。

そう考えると、ドラキュラは極めてディオニューソス的な存在であることが分かる。ディオニューソスはブドウの蔦に象徴される植物神でありキリストの血とされたワインの神でもある。

さらに、この薫が意味しているものは蛇＝ドラゴンであり、その本体は、多分、ヘルメースと同じ男根の蛇神だったのである。ディオニニューソスの祭りも聖ジョージの祭りも、樹木を手にして野山を徘徊し、祭りのクライマックスには両者ともに「王」が生贄となったのである。

七 植物神と蛇と鏡と十字架

ドラキュラとデュオニニューソスの比較で、さらに面白いことには、ディオニニューソス自体、「鏡」によって死ぬ運命にあったことである。ここで、ドラキュラの叫び声が聞こえてこないだろうか。「この鏡が曲者じゃ。鏡なんてものは、人間の虚栄のおもちや（a foul bauble）みたいなもんじゃ。こんなものは捨てちまえ！」つまり、ドラキュラの台詞もディオニニューソス神話もともに「鏡」を、「憎むべきおもちゃ」として語っていたのである。では、ドラキュラが語る玩具「おもちゃ」＝「bauble」とはいかなるものだったのだろう。

実は「bauble」とは、そもそもは、中世の道化師「フル」たちが使っていた杖のことであった。つまり、音韻的な連想からしても「a foul bauble」とは「a fool's bauble」、つまり、「道化の笏杖」のことではなかったのだろうか。（写真2）

ところで、神話の中の「道化」の存在とは、まさに「冥界下り」の構図において登場するものであった。それが、デーメルを喜ばせるイアンペーであり、天照大神に天岩戸を開かせ、猿田彦を鎮める天細女のあられもない姿である。実はデ

ュオニニューソス自身にも、男根柱の誕生縁起として、ディオニニューソスの冥界下りの話が伝わっているのである。洋の東西を問わず同じ構図で語られる「冥界下り」だが、ここでは、日本神話の構造を例にとり、道化と道祖神と鏡と十字架の構図を一気に解き明かしてみよう。

高天原から瓊瓊杵尊が降ってきた際、一人の神が天八達之衝に立ちふさがっていた。神

代紀第一の一書によると、「眼は八咫鏡の如くして、赤酸醬に似れり」という。つまり、眼は八咫鏡のように、照り輝いて、まるで赤い酸醬のようだというのである。

また、天照大神を岩戸から出そうとする天細女の踊りとともに岩戸の前の賢木（男根柱）に掲げられたものも、この八咫鏡であった。

さらに、八岐大蛇退治の話でも、大蛇の眼を形容したのが、



写真2 エラスムスの「痴愚神礼賛」にホルバインが描いた挿絵（左右とも）。道化のボーブル（男根？）は、鏡と同じく道化自身を映すもので、自己省察を妨げる「虚栄心」を表しているという。

この赤酸醬あかかがぢであった。そういえば八岐大蛇とは八つに分岐した蛇であり、猿田彦神も天の八衝という八つに分岐した地点に立ちふさがっていたではないか。この構造を同じくする三つの物語をそれぞれ比較すると、猿田彦神の照り輝く赤酸醬あかかがぢの眼とは、天照大神自身の姿であり、天岩戸の隙間からこぼれ出る朝日としての赤い光が、八咫鏡に照り映えたものではなかったか。しかも、その眼は、八岐大蛇のものでもあったはずだ。これは龍神や蛇神の多くが太陽神であり、辰巳が方向では東南を、季節では立夏を表し、時間では朝を表していることも絡んでいるかもしれない。そして、「ドラキュラ」においても真つ赤に燃える眼が登場し、それは、沈みかけた日の光が反射したものとされていたのである。このおぞましき眼こそが、邪眼とか邪視よこめ（evil eye）と呼ばれたものであることは明らかだろう。

そこで天鈿女が性器を開陳し、この邪視を無効にするのであるが、何故、天鈿女が自分の性器を見せると、猿田彦神≡天照大神は鎮まるのだらう。多分、道化は、猿田彦神≡天照大神の渦巻き散乱し荒ぶる欲望のエネルギーに一つの流れの道をつくり、乱流を整える行為を行っているのではないだらうか。いわば整流装置のようなものであり、まさに「道化」はエネルギーの通り道と化しているのかもしれない。

つまり、荒ぶるカオス竜（八岐大蛇）である猿田彦神や天照大神は、実は眼に見える存在ではなかったのだ。それは多頭の蛇を頭にはやしおぞましきメデューサなのである。その凄まじいエネルギーを見たならば、眼は潰れ、まさに邪視の呪いと

して身を滅ぼすことになるだらう。つまり、邪視とは見られる恐怖ではなく、おぞましい存在を見ることの恐怖を当のその相手に投影したものだっただけではないだらうか。その意味では冥界下りの「見るな」の禁」とほぼ同じものである。

見る見られるの反転は、邪視者の恐怖をつのらせ、もはや我々は身動きすらできなくなり、まさに石と化すであらう。このおぞましきメデューサを忌避し象徴化することで倒すペルセウスの戦略が、まさに「鏡」≡蛇身（カガミ）だったのである。つまり、天鈿女は、自らの女性性器を鏡（母なる身体）として、おぞましい男根をそこに映し取るのである。こうして象徴化されたからこそ、メデューサや猿田彦神、天照大神は我々に見える姿で現れることができたのである。

ところで、猿田彦神の酸醬カガチのような眼は、鏡かがみにつづる朝日の赤であると同時に、大蛇カガシの眼でもあった。しかも、猿田彦神自身、道の分岐点に置かれた男根柱で表され、その代替記号が、十字架としての案山子カカシではなかったか。

萬植物「酸醬カガチ」と「蛇カガミ」と「鏡カガミ」と「十字架カガシ」という、一見全く違うものが、「蛇」の古語「カカ」という言葉で括られていたのは、「映される対象」と「映し出した装置」と「映し出された映像」が、同じ「蛇」という言葉で語られていたにすぎないのである。

つまり、萬植物・酸醬カガチで表される男根の蛇は、母なる身体を鏡カガミ≡蛇身として写し取られてはじめて意味化し、象徴的な男根≡男根柱≡十字架≡案山子カカシに置換されるはずである。

しかし、ドラキュラは、見るな、禁とおなじく鏡に写し取られることを拒絶している。映ることのないおぞましい想像的な男根^{カガミ}蛇身であるドラキュラを写し取るためには、鏡に代わって彼の絵を描いてやればいいのではないだろうか。そして彼の絵姿とは、まさに、男根柱であり、象徴的男根である十字架そのものだったはずだ。つまり、ドラキュラの目の前に十字架を掲げる行為こそが、構造的にドラキュラが鏡に映ることと同じ構図にあったのである。

そして、まさにこの構図こそ、見るな、禁を破り、冥界から遁走し、おぞましい想像的な男根に変わって象徴的な男根を立てる行為であり、邪視よけの性器をかたどったお守りの退魔の構図だったのである。

八 生殖隠喩としての十字架とロザリオ

ここにおいてドラキュラとは、死して甦る豊穡と生殖の大地母神だと断定していいだろう。しかも、母神であるはずのドラキュラが徹底的にファロサントリック（男根中心主義的）に語られてきた理由もわかったはずだ。

我々がファロス（男根）の表象としてドラキュラをとらえてきたのは、母なる欲望の鏡に映し出された欲望対象を見ていたにすぎなかったのだ。その本質が大地母神であるならば、ドラキュラの本体は、母なる欲望の身体^ニ女性性器としての大地の土に他ならないはずである。

つまり、ドラキュラが運ぶ五〇個の箱に詰められたトランシ

ルヴァニアの土こそが、ドラキュラの本体だったのだ。そこでドラキュラ討伐隊は、この土を聖化しながらその数を数える（カウント）のである。つまり、ドラキュラ伯爵（カウント・ドラキュラ）とはホモニム（同音同綴り字）の字義的には、まさに「ドラキュラを数える」ということではなかったか。そして、この五〇という数字こそ、小説の冒頭でジョナサンが宿のおかみにもらったロザリオの玉の数に關係していたのではないだろうか。つまり、ロザリオの五〇個の玉は、「アヴェ・マリア」の朗誦の数を数えるものだったのである。³²

さらに、アヴェ・マリアとは、神の子を産む「母」を賛美する祈りであり、慈母的なものへの帰依の表明であった。皮肉なことに聖母マリア信仰とは、キリスト教が徹底して抑圧した³³「母なるもの」への信仰の代替物として広く信仰されていくのである。つまり、ファロサントリズム（男根中心主義）のキリスト教によって抑圧された大地母神信仰は、聖母マリア信仰へと姿を変えることで、その命脈を保ったのである。

ストーカーは十字架を原初の意味である男根へと連れ戻しただけでなく、女性性器を表象するバラ^ニロザリオと大地の土を登場させることで、生殖の隠喩を完成させていたのだ。

つまり、ドラキュラ討伐隊が最後の土の箱の数を数え終わるとき、母なるドラキュラはその大地の身体に樹木の杭^ニ男根を突き立てられることで生殖隠喩を完成させるとともに豊穡祈願の供犠となっていたのである。

そして「ドラキュラ」の最後は、ミナ（＝聖母）とジョナサ

ンに子供が生まれ、その子を膝にのせながら語るヴァン・ヘルシングの言葉で終わるのである。³⁴ここに聖母と化したミナへの賛賛が語られるのだが、まさに「ドラキュラ」は、アウエ・マリアと同じく「母なるもの」への賛美と新しい生命の誕生をこととほぐ出産儀礼の物語であり、まさに産婆の神ヘカター³⁵の物語だったのである。

注

*0 この拙論では、そのキャラクターを表す場合は、単にドラキュラ、オリジナルの小説を表す場合は「ドラキュラ」あるいは「吸血鬼ドラキュラ」の表記を用いることとする。なお、引用は、日本語訳に関しては、平井呈一『吸血鬼ドラキュラ』創元推理文庫一九九三年第二七版を使用し、DRの略のもとページ数を付記した。また、英文に関しては、全てLeonard Wolf, (ed.) The Essential Dracula, A Plumebook, 1993を使用し、EDと略しページ数を付記している。

*1 プラム・ストーカー（一八四七―一九二二年）は、アイルランドのクロンターフに生まれ、演劇好きが高じてロンドンの劇団マネージャーになる。マネージメントの傍ら七年の歳月をかけて書き上げられたのが「ドラキュラ」である。

*2 ドラキュラが世に登場したのは、一八九七年の五月一日、ライシラム劇場の演目として登場、その八日後、ロンドンの出版社アーチボルド・コンスタブル社から三〇〇〇部出版されている。

*3 たとえば、二〇〇三年の現在においてさえ映画においては「アンダーワールド」の公開や、「ブレード2」「クイン・オブ・ザ・ヴァンパイア」等のビデオリリースがあり、「吸血鬼ハンターD」や「ヘルシング」、「悪魔城ドラキュラ」に「バンパイア・ナイト」など、小説やコミック、アニメやゲームソフトに至るまで、ドラキュラのイメージは様々なメディアの中にあふれている。

*4 「ノスフェラトゥ」(Nosferatu, eine Symphonie des Grauens)一九二二年、ドイツ 監督 F.W.ムルナウ 脚本 ヘンリク・ガレーン 出演 マックス・シュレックほか。吸血鬼映画の最高傑作とされる無声映画である。

*5 「エイリアン」(Alien)一九七九年、アメリカ、監督 リドリー・スコット 原作・脚本 ダン・オバノン 出演 シガニー・ウィーバーほか

怪電波を傍受したノストロモ号はある惑星で難破船を発見する。そこで見つけた卵から飛び出したエイリアンが乗組員ケインの顔面に付着。ケインとともに船内に運び込まれたエイリアンに変態しながら次々に乗組員を襲い、リブリーだけが残されるのである。このエイリアンが母なるものの象徴であったことはその後のシリーズを見なくても明らかだろう。エイリアンは生む「膿む」「蒸す」「モス」「蛆虫」「虫」「ワーム」「マムシ」「蛇」「竜」「ドラゴン」「ドラキュラの全ての連想を包摂する、おぞましき母であった。この母なるおぞましきものが乗船した船の乗組員は、デーメーテル号と同じくその姿を見ることがなく次々に消えていくのである。

*6 「遊星からの物体X」(The Thing)一九八二年アメリカ、監督 ジョン・カーペンター 脚本 ヒル・ランカスター、出演 カート・ラッセルほか

*7 「2001年宇宙の旅」(2001: A Space Odyssey)一九六八年、アメリカ、製作・監督・脚本 スタンリー・キューブリック 原作・脚本 アーサー・C・クラーク 出演 ケア・ダレー他 創世紀から人類の進化に影響を与えてきた未知の石版状の物体モノリス。その謎を解くべく木星へと飛び立つたディスカヴァリー号の五人の乗組員は、コンピュータの反乱によって一人、また一人と殺されていく。これはまさにドラキュラのデーメーテル号のシンそのものである。つまり、月女神デーメーテルが支配する大地（月）トランシルヴァニアから掘りだされたのは、両者ととも立方体（モノリス＝土の箱）であった。船（ディスカヴァリー号＝デーメーテル号）は、この「月」＝

「大地」から授けられた (given > datum = data) 言い表すことのできない物を積み込む (in put) の言い表すことのできないおぞましい「地球からのデータ」「大地の土」によって、船の航行をつかさどる「コン・ユータ HALL」「船員」は狂気・月の病 (ルナティック) におかされ両者ともに船員が消えていくのである。

* 8 「リング」一九九一年、鈴木光司著、角川書店。見たものは一週間後に死ぬビデオ・テープ。その死を回避するには、ビデオをダビングして他人に見せて感染させること。このモチーフがドラキュラの吸血行為の連鎖と全く同じであるばかりが、感染から発病までの潜伏期間があることまで類似している。さらに、ドラキュラの物語は、記録体形式であり、すべてがメディア (新聞記事、日記、手紙等々) の集積である。しかも、小説の中でもジョナサンがドラキュラ城で書いた日記 (記録媒体) を読んだミナにドラキュラの呪いが感染し、呪いに感染したもののだけがテレパシーを感受でき豊媒 (メディア) となって、事件を解き明かすという構図まで同じである。さらに、ドラキュラは大地母神のトートム獣として「犬」として現われるが、犬とは出産呪術としてまさに貞子の「井戸」にかかわるものであった。

* 9 平松洋「ドラキュラ100年の幻想」東京書籍、一九九八

* 10 DR, p.13. ED, p.9.

* 11 「あなたはいかなる像も造ってはならない。上は天にあり、下は地にあり、また、地の下の水の中にある、いかなるものも形も造ってはならない。あなたはそれらに向かつてひれ伏したり、それらに仕えたりしてはならない。わたしは主、あなたの神。わたしは熱情の神である……」出エジプト記 20. 4-5

* 12 「首からはずした数珠を手早く二つちらの首にかけると、急いで部屋をでていってしまった」DR, p.13. ED, p.9. 平井氏の訳で「数珠」と訳されたものにその十字架のついたロザリオ (the rosary) である。また、ドラキュラの狂気を払うのも平井氏の訳では「伯爵の手が自分の首にかけている十字架にさわった」(DR, p.46. ED, p.34) となっているが、原文では the string of beads (一連の数珠) つまりは、ロザリオ

に触れたのである。

* 13 Homer Smith, Man and His Gods, Boston 1952, p.188. バーバラ・ウォーカー著「神話・伝承事典」山下主一郎他訳、大修館書店、一五六頁の指摘より。尚、十字架像の図像史として重要なローマのサン・サビナ寺院の木製扉に彫られたレリーフには六世紀のものであるが、煉瓦の壁の前にはりつけにされたキリストの左右に聖書にある罪人も描かれていた。しかし、罪人二人の後ろには十字架が見えるのだが、キリスト自身の背後には十字架が見えない。山下主一郎氏は「シンボルの誕生」大修館書店一九八七年の中で、扉が造られた頃 (山下氏によると五世紀) にはまだ、十字架刑が下層階級のもので、イエスの姿にそうした光景を重ねるのがはばかれたのではないかと指摘している。つまり、十字架とはまだキリストのシンボルとして流通していなかったのである。

* 14 前掲書「神話・伝承事典」一五四頁

* 15 野口洋二「メロヴィング期ガリアにおける異教的伝統とキリスト教」『早稲田大学研究紀要』第36輯、一九九〇、一七〇―一七一頁。ガリアの異教とキリスト教布教の関係資料は本論考を参考にさせていだいた。

* 16 高坂正顯「神話 解釈学的考察」岩波書店、一九四〇年、一六頁

* 17 呉茂一「ギリシャ神話」新潮社、一九六九年、一八頁

* 18 前掲書「神話・伝承事典」三一九頁

* 19 前掲書「ギリシャ神話」一八頁

* 20 DR, p.126. ED, p.105

* 21 Sir James George Frazer, The Golden Bough, Macmillan, 1922, pp.145-46. フレーザー「金枝篇」永橋卓介訳、岩波書店、一九六七年、第五版、第十章近代ヨーロッパにおける樹木崇拜の名残り、二六九頁、二七三頁

* 22 Jacobus de Voragine, The Golden Legend, New York: Longmans, Green & Co., 1941. 前川・今村訳『黄金伝説』人文書院、一九八四、一五五頁

* 23 N・M・ニコリスキー『ロシア教会史』宮本延治訳、恒文館、一九九〇年、十一頁

* 24 前掲書『ギリシャ神話』一七六頁

* 25 ゼウスの正妻ヘラは、夫が他の女に生ませた子であるディオニューソスに嫉妬し、ティーターンらに斬殺させる。このとき幼きディオニューソスがおびきだされたのはヘラが与えた玩具のせいであった。その玩具には様々なものがあつたとされるが、その一つが「鏡」だったのである。Harrison, *Prolegomena to the Study of Greek Religion*, p.490. 前掲書『神話 解釈学的考察』四九頁の指摘による

* 26 DR, p.46, ED, p.35.

* 27 前掲書『ギリシャ神話』一五六頁

* 28 あるときディオニューソスがハデースに下った折りに道がわからなくなりプロシムヌスというものが道を示すかわりに報酬を要求した。それは愛欲の楽しみであった。ディオニューソスは、再びハデースに下った時にその願いをかなえると約束し、道を教えてもらつた。そして、ディオニューソスは、再びハデースに赴いたが、プロシムヌスはすでに死んでしまつていた。そこで、ディオニューソスは、彼の墓に出向き、無花果の木から小枝を切り取り、男根の形にし、その上に乗つて死者との約束を果たしたのである。この出来事から町々でディオニューソスのために男根の形が立てられたというのである。
G.Telchmüller, *Neue Studien zur Geschichte der Begriffe, I.HelS.32*. 前掲書『神話 解釈学的考察』一三八―一三九頁より要約。

* 29 「一瞬、その見も知らぬ人が燃えている炎のようなまっかな目をもっているように見えたからだだったが、すぐにそれは錯覚だと分かった。腰掛のうしろの聖母教会の窓々には、赤い夕日がキラキラ輝いて、日が沈むにつれてまるで炎が動くように、刻々に反射の色がチラチラ千変万化している最中であつた。」 DR, p.149, ED, p.126.

* 30 「呪力をもつ眼すなわち呪眼が相手に対して悪意をもつとき、それは邪眼となる。」多田智満子『鏡のテオリア』大和書房、一九七七年因みに、これを邪視となすけたのは、南方熊楠氏であり、『東京人類

学会雑誌』二四巻二百七十八号に「小児と魔除」という論文の中で取り上げている。

* 31 吉野裕子『蛇 日本の蛇信仰』法政大学出版局、一九七九年。吉野裕子氏は豊富な例証と卓抜した考察力によって、日本の原始信仰における蛇神信仰を例証している。

* 32 ロザリオ自体の基本形は、大珠五個と小珠五〇個を大珠一個と小珠一〇個に分け、鎖や紐で環状にふなぎ合わせたものである。折りの方法は、大珠一個で「主の祈り」を一回唱え、小珠一〇個で「アヴェ・マリア」を二〇回唱え栄唱で結ぶ。これを一留といひ、五回繰り返して一環となり、これを三回行う。つまり、一五回の主の祈りと二五〇回のアヴェ・マリアが唱えられ、これが、キリストの一五の秘義と聖母マリアに捧げられた「霊的な薔薇の花冠」を意味していたのである。

* 33 前掲論文「メロリング期ガリアにおける異教的伝統とキリスト教」一七二頁にあげた「迷信と異教のリスト」の第一九項目には「信徒が聖マリアにたいして唱える願ひことについて」と書かれていた。これは、聖母マリア信仰そのものが、異端的行為に他ならないことを明確に表明したものである。

* 34 「ただこの坊主が、いまに大きくなって、自分のお母さんが男まさりでりっぱな人だったということを知れば、それでいいのだ。お母さんのやさしいことと、かわいがってくれることは、このぼろぼろ、すでに知つとるがね。もう少しつと、お母さんがどうして男の人たちのなかで愛されたか、どうして男の人たちが、お母さんのためにあんなに尽くしたか、それがわかつてくるよ。」 DR, p.548, ED, p.445.

* 35 キリスト教が魔女として排撃した産婆たちがあがめる神がヘカテーであつた。そして、ニンニクは出産の精をつけるために産婆たちが処方したものだ。しかも、ヘカテーの祝祭の中心的シンボルとしてもニンニクは用いられまさに満月の夜に男根柱のつべんにニンニクは挿けられていたのである。男根柱ヘカテーとヘカテーのシンボリズムこそが、ドラキュラ退魔の構図であつたのだ。